

# ハムレット映画『炎の城』について

佐々木 隆

## プロローグ

これまで日本におけるシエイクスピア映画は、黒澤明監督『蜘蛛巣城』（一九五七）、『悪い奴ほどよく眠る』（一九六〇）、『乱』（一九八五）と言われてきた。

その後、研究も進み、荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』（一九五〇）が実は『じゃじゃ馬ならし』『間違いの喜劇』、『十二夜』を組合わせたシエイクスピア映画であることも指摘されている。しかし、これまで加藤泰監督『炎の城』（一九六〇）についてはほとんどハムレット映画としての研究がなされていない。ここでは『炎の城』について取り上げてみたい。



## 一 映画監督加藤泰

加藤泰（一九一六一—一九八五）は、時代劇や任侠映画の監督として『沓掛時次郎 遊侠一匹』、『臉の母』、『明治侠客伝 三代目襲名』、『源氏九郎颯爽記』シリーズ、『緋牡丹博徒』シリーズ、『江戸川乱歩の陰獣』などで知られている。ハムレット役の王見正人を演じる大川橋蔵とのコンビでそれまで『緋ざくら大名』（一九五八）、『紅顔の密使』（一九五九）、『大江戸の侠児』（一九六〇）の二本の映画を製作し、日本版ハムレット『炎の城』（一九六〇）でも大川橋蔵が主演を務めた。

## 二 『炎の城』

加藤泰監督『炎の城』（東映）は一九六〇年十月三十日封切りの『ハムレット』の日本翻案映画である。これまでほとんど注目されていなかった。加藤泰自

身が『ハムレット』を原作にして映画化したことを述べている。加藤泰『加藤泰資料集』（北冬書房、一九九四年十月）には「演出ノート」が掲載されている。

今度の作品『炎の城』は、素材を“ハムレット”にとりました。

そして、なにか新しい時代劇を作り出そう、というのが私の狙いなのですが、（二二〇頁）

脚本は八住利雄（一九〇三—一九九一）はすでに脚本家としても有名なだけでなく、『シェイクスピア物語』の翻訳等にも係ったことのある人物である。主なキャストをシェイクスピアの原作と列挙すれば次のようになる。もちろん、設定が異なっていることもあるが、翻案となっている分、ある程度の整合性があることも否定できない。

おもなキャスト

ハムレット 王見正人／大川橋蔵

オフィーリア 六角雪野／三田佳子

ガートルード 時子／高峰三枝子

クローディアス 王見師景／大河内伝次郎

ホレイシヨ 多治見庄司／黒川弥太郎

ポローニアス 六角直之進／薄田研二

レアティーズ 六角祐吾／伊沢一郎

フォーティンbras 相楽宗恵／坂東吉弥

亡霊 前城主／明石潮

原作『ハムレット』と『炎の城』の最大の相違点は『炎の城』では王見正人が死ぬことなく、若殿として領民の幸せと許嫁の六角雪野を不幸にしてしまったこと（雪野は入水自殺）への許しを請う場面で終わりとなることだ。

### 三 シェイクスピア映画『炎の城』の研究状況

日本の翻案物『ハムレット』映画は黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』は一九六〇年九月十九日に公開され、『炎の城』は一九六〇年十月三十日に公開された。黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』は黒澤明自身が原作が『ハムレット』であることは明かしていないが、後年の研究により今では『蜘蛛巣城』『悪い奴ほどよく眠る』『乱』と共に三本のシェイクスピア映画として学界でも認められ、すでに定説となっているところだ。しかし、加藤泰監督『炎の城』についてはほとんど取り上げられていない。

藤井康生「映像の中の芸能四十一 『ハムレット』『炎の城』」『上方芸能』百八十六号、二〇一二年十二月）はおそらく初めて『炎の城』を『ハムレット』映画として取り上げたのではないだろうか。しかし、次のような記述を無視することはできない。

## 大川橋蔵のハムレット

舞台では頻繁に上演される『ハムレット』だが、日本映画にならないのはどうしてだろう。正確に言えば、一本だけである。それは大川橋蔵主演、加藤泰監督の『炎の城』（昭和三十五年、東映）である。（八六頁）

藤井の論文で取り上げている項目次の通りである。

染五郎の『ハムレット』と『葉武列士倭錦絵』

『仮名手本ハムレット』

大川橋蔵のハムレット

洋画の『ハムレット』

・オリヴィエ監督（一九四八）

・コージンチェフ監督（一九六四）

・ゼツフィレッツリ監督（一九九〇）

・ブラナー監督（一九九六）

## トマのオペラ『ハムレット』

藤井論文ではシェイクスピア映画研究では今や定説になっている黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』（一九六〇）について言及すらしていない点は映像

研究として評価はできないだろう。藤井論文によると「この『炎の城』は大作だが、感銘が薄いのは、

活劇調だからだろう。『ハムレット』は内省のドラマなのである。」（八七頁）としているが、荒井良平監督『エノケンの一代豪傑男』（一九五七）がシェイク

スピア作品を原作にした翻案映画であることを知れば、単純に活劇調だから感銘が薄いとでは片づけられないではないだろうか。『リア王』でも改作として

リア王が最後に再び王位につき、コーデイリアがエドガーが結婚し、ハピーエンディングで終わるものさえ舞台では上演された。『炎の城』は日本の時代劇の持つお家安泰という秩序の回復が大きく影響して

いるものと考えられる。今後分析としては、『NINA GAWA ハムレット』に代表されるような時代劇風『ハムレット』の上演なども取り上げ、翻案『ハムレット』と日本の時代劇との融合として『炎の城』に注目していきたい。

## エピローグ

藤井論文により『炎の城』がクローズアップされたことにより、日本の五本目のシェイクスピア映画が見出されたことになる。加藤泰監督自身がハムレット映画と明言しながら、また、『キネマ旬報』や映画事典類でも「加藤泰」「大川橋蔵」の項目を見ると確かにハムレット映画『炎の城』は言及されているにもかかわらず、シェイクスピア映画研究で欠落してしまっただのは何故か。一九六〇年の九月に『悪い奴ほどよく眠る』十月に『炎の城』が封切られたのは単なる偶然なのだろうか。インターネットでこの『炎

の城』の英語タイトルが *Throne of Flame* となっているが、これは明らかに『蜘蛛巣城』（一九五七）の英語タイトル *Throne of Blood* を意識していることは容易に想像がつく。今後は筆者自身が『炎の城』について研究を進めたいと思う。